

アシシ。の掌編劇場①

ケンの思い出

作・芦川淳一

★ 操作方法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

まだ東京に原っぱがあつた時代の話だ。

小学三年生のぼくは、クラスのリーダー的存在だったマサトに、野球チームを作るから入らないかと誘われた。それまでキャッチボールくらいしかしたことはなかったが、下手でもいいというので、ぼくは参加することにした。

放課後に、近くの原っぱで練習をしていると、ケンという若い男性が、監督をさせてくれといってきた。ぼくらは相談して、監督はいたほうがいいなと思つて迎え入れた。

ケンは九歳のぼくらより十くらい上の小柄な人で、なにをしているのか、どこに住んでいるのか、ぼくらは知らなかった。

ケンは、どんな選手に対しても、褒めるのが上手かった。ぼくは、最初のころは打っては空振りばかり、守備では、ぼてぼてのゴロも後逸した。ところが、ちよつとしたよいところを褒

めてもらっていたら、ほんの一月ほどで、かなり上手くなれたのである。

ポジションも外野のレフトから、二塁手になった。打順も九番から五番と上がった。もつと上手くなって三番か四番を打ちたいし、ショートを守ってみたいというのがぼくの目標になった。

ケンには、日曜日にはほかのチームとの試合も組んでくれた。ほとんどの対戦チームは、お揃いのユニフォームを着ていたが、ぼくたちは、選手もケンも普段着のままだった。

結果は負けてばかりだったが、ケンは怒ることとはなく、

「よくやったよ。お前たちは、もつと練習すれば、勝てるようになるぞ」

そういつて、励ましてくれた。

ぼくは楽しかった。チームの仲間たちも楽し

かったはずだ。誰も練習を休むことがなかったのだから。

ところが、四年に進級するときに、クラス替えがあり、ぼくはマサトと違うクラスになってしまった。ぼくのクラスには、チームの仲間はいなかった。

ぼくは、クラスが違って、また同じチームで練習し、試合をするものだと思い込んでいたのだが、

「クラス替えしたから、チームは解散だ」

あつさりとマサトに告げられたときは、愕然とした。

「ケンにはなんていうの?」

ぼくの問いに、

「なんにも。面倒くさいからな。お前もいう必要ないぜ。もつと広いグラウンドでユニフォー

いようだった。

そして、いつもの練習の日になった。

ぼくが原っぱへ行くと、チームの仲間はいなくて、ケンだけが待っていた。

「ほかの連中は遅いな」

ケンは、普段どおりに、みんなが集まると思い込んでいたようだった。

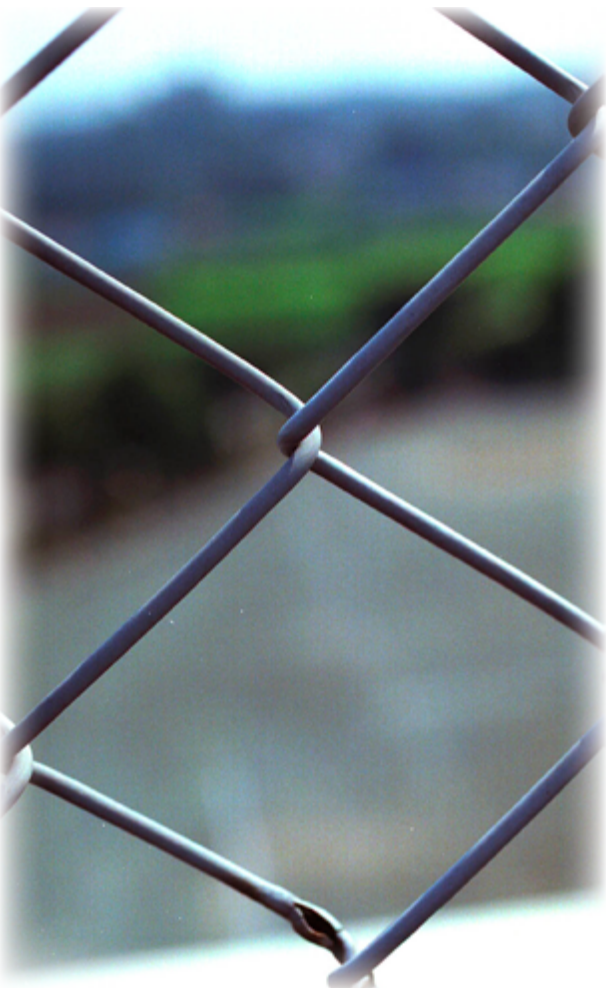
ぼくは、口ごもりながら、クラス替えでチー

ムのあるチームに入ったほうがいいぜ。ケンだと試合に勝てないし、たいした監督じゃないよ」「でも、みんな上手くなってるから、今度は勝てるよ。だから……」

ぼくの言葉は、走り去ったマサトには届かなかった。

ほかの仲間たちも、マサトが決めたことだからと、チームを去るそうさ。中には、つづけた

い者もいたに違いないが、マサトには逆らえない



ムが解散したことを告げた。

「そっか、そりゃあしかたないな」

僕は、ケンが怒るかと思ったが、あっさりとした答えが返ってきた。

「いままでありがとうございました」

ぼくが、しょんぼりとした声で言うと、

「ああ」

ニコつと笑い、じゃあと手を上げて去っていった。

ケンの後ろ姿は、心なしか寂しそうだった。ぼくは濟まない気持ちでいっぱい、大切なものを失くしたような気分だった。

その後、マサトは大きなチームに入り、ほかの仲間も、バラバラのチームに入った。

ぼくも新しいチームで野球をしたが、叱られてばかりで、ケンがいたときのような楽しい野

球は、二度と味わえなかった。そのせいだろうか、あまり上達もしなかった。

大人になり、ケンのことをたまに思い出すことがある。

ケンは、素晴らしい監督だったと……少なくともぼくにとっては。

そして、最後に別れたとき「ありがとう」の言葉をちゃんと言えた自分が誇らしく思えた。

(了)

